特集Ⅱ あなたは映画『新聞記者』をどう読む？

２０１９年　スターサンズ　イオンエンターテイメント
監督　藤井道人　企画・制作　河村光庸　１１３分
脚本　詩森ろば、高石明彦、藤井道人
出演　シム・ウンギョン、松坂桃李、北村有起哉、田中哲司

政治色の濃い映画は日本では敬遠されがちだが、久しぶりにそんなハードルを飛び越える作品が現れた。敏腕プロデューサー河村光庸の企画で作られた『新聞記者』である。

本作品はフィクションとしても質の高い作品となっているが、政界で最近起こった事件を思わせるシーンが次々と映し出され、政治サスペンス作品として話題を呼んでいる。民主主義の危機がささやかれる昨今、「あなたはこの作品をどう読む？」ご寄稿をお願いした方々の熱いコメントをお読みください。

編集部

権力に挑む力作

藤田　明　映画評論家

渦中の２人揃って三重でトーク

６月某日　河芸で前川喜平（元文部次官省内の不祥事で辞任）トーク。６０分に一本の伊勢鉄道ゆえ会場へ３０分前に入る。５００円の前売り券だったが定員５００のうち空き席はわずか、なんとか座れた。各省庁とも主な人事を官邸に握られ、ファシズム同然。内調（内閣情報調査室）の右紙への情報流しでひどい目に遭ったという辺りがヤマ場か。今日は四日市で望月記者（現東京新聞記者）がトークしているとも。映画『新聞記者』公開前に２人が同時とは。電話予約しておいたのに満席になったとして入れず、帰宅した怒れる知人あり。他にも実行委員会の側のまずい対応例を耳にした。主催者の未熟をどう考えたらいいのか。

7月某日　津のシネコンでは朝9時か、夜7時半の2回上映だけ。自転車族は雨では行けず、曇り日の到来。で、8時半に家を出た。客は5人。以下、メモ列挙の形で示したい。

①女性記者・吉岡役にシム・ウンギョン。望月記者と違う控えめな役柄で、官房長官に挑むタイプではない。今の列島にこの役をこなせる女優なしとは情けないが、隣国からの助け舟。日韓関係のきしみばかり報じたがる風潮の中、新鮮さがいい。

②対する若手官僚、杉原役は松坂桃李。まずまずだが、脚本上で一子誕生の件を挟んでしまい、前半の従順と後半の苦悩とに分裂した。上司の自死も脚本のツメ不足。近畿財務局の材料を移し、いい意味でキワ物に仕立てたのだが。

③内調のトップ、鉄面皮役は鈴鹿出身の田中哲司。もっと追ってほしいと思えるほど興をひく。情報収集に加えてフェイクすれすれの情報操作の源。虚構的視覚化には違いない。

④脚本には河村プロデュサーも加わった3人。何よりも内調を相手取った点が意義深い。本当はイタリアのF・ロージのように闇の深部にまで至って欲しいところながら。

⑤藤井道人の演出。新聞社内を揺れるカメラで、というのは、例の『カメ止め』の浅さに通じる。北村有起哉のデスク役などじっくり描くべきで、メディアの一端をとらえ損ねた感。しかし困難な状況下、権力に挑む力作をものした功はある。次はファンタジーとか、その辺はよかれあしかれ、今どきの若い世代と言えよう。

国家=悪、メディア=善、の単純構図

西松　優　日本映画愛好家

キネマ旬報は高評価で日経新聞の映画評は低評価、自分ならどう評価するだろうかとこの映画を見た。「人間」が描き切れておらず、私の結論は日経新聞の評価に近い。

私が大事だと思っていることは、「人間」を描き切ることだ。しかし、この映画は悪事を行い隠ぺいする国家は絶対悪、それを暴く女性新聞記者は絶対善という単純な構図で一貫してストーリーを展開していく。

天下り斡旋で懲戒処分を受けた元次官前川喜平氏、官房長官会見の質問で話題になった望月記者が討論番組で持論を述べるシーンが頻繁に挿入される。また、プロデューサーが「政治の季節を意識している」と答えたという。そんな意図を映画は前面に押し出そうとする。そのためこの構図で人間を描かざるを得ないのだろう。

絶対善の正義側は自死した父親の無念を胸に真実を追求

する女性記者吉岡（シム・ウンギョン）、それを暖かく支援する新聞社の上司・同僚たち、一方絶対悪を体現するのは内閣府の上司多田（田中哲司）である。良心の呵責と仕事の狭間で揺れる内閣府の良心派は正義側に加担し悲惨な結果が待ち受ける。それが先輩神崎と杉原（松坂桃李）だ。神崎は内部告発し自死を選び、杉原も左遷を示唆される。サスペンス仕立てであるが、如何せんこの組み立て方はいかにも陳腐ではなかろうか。

神崎の人物像には人間らしさが感じられない。例えば、杉原が神崎の死と良心の呵責から内部告発するが、それを突き動かすものは覚悟もない衝動的な正義感だけだ。人間は多面性を持ちそんな単純ではない。まして、高学歴の上級官僚だ。もっと、自分の家族や全人生を真剣に考え行動するだろう。それ故に、ラストの杉原の表情には強い違和感を覚える。こんな表情をするということはあまりに楽観的で覚悟もない人物だということを表わすからだ。また、絶対悪の象徴の多田は冷酷で狡猾なだけという描き方で人間臭さが微塵もない。一方、女性記者吉岡の描き方も型どおりだ。良心派官僚のリークだけで何も手を汚さず棚ぼた式に機密情報を入手しスクープできてしまう。例えば、内閣府内の人事争いからのリーク、女性記者の手を汚しての機密入手等にすれば、もっと人間臭さや心の葛藤の描写が生きてくるのではないか。

映画は人間をどう深く洞察し描くか、観客が人物にどう寄り添えるかで作品の良し悪しが決まると私は思う。

神崎夫人役の西田尚美が、『凪待ち』に続き、地味だがいい味を出している。

記者の活躍・潔さに拍手

伊藤英子　男女共同参画みえネット

最近、「男女共同参画みえネット」というグループ内で話題になったのが東京新聞記者望月衣塑子さんである。まるで追っかけのように、津市の講演会、四日市の講演会と連続で聞きに行った人は、その話題性、歯切れの良さにいたく感心していた。その望月さんの著書を原案としてつくられた映画『新聞記者』が上映されるとあって早速見に行った。

映画はフィクションとはいえ、誰もが知っている文部科学省の大学新設問題を軸に展開し、望月さんの生き方そのものが、潔いので、映画の新聞記者にも拍手を送りたくなった。

先ず、私がこの『新聞記者』というタイトルを見て思ったのは、さすがに今の時代、女性記者などとは言わなくなった

ということ。しかしセクハラ、パワハラ問題は未だなくならない現状の中で、望月さんも女性剣士のように、丁丁発止と切り抜けてきたであろう。

さて、映画の主役は男女二人いる。新聞記者には韓国の有名女優シム・ウンギョン「父は日本人、母は韓国人、育ちはアメリカ」という設定になっている。早口ではない話し方、日本ではあまり知られていない顔立ちが、かえって存在感があって、実在する記者らしく、説得力があり成功したと思う。

一方男性の主役、エリート官僚には、松坂桃李。変幻自在に様々な主役をこなすベテランである。外務省から内閣情報室に出向したエリートは、その育ちが良い有り様。その妻も高層のマンションに住み、屈託がない。この個人の平和を守るために、尊敬する上司の自殺の真相に目をつぶるのか、正義心の狭間に揺れる苦悩の表情はさすがの演技で、印象に残っている。そしてそのセリフとともに舌を巻いたのが、冷酷な参事官役の田中哲司。「この国の民主主義は、形だけでいいんだ」と言い放つ。本当に聞いていて腹が立った。演技も上手かったからだ。

映画は、ハラハラドキドキの場面もある。重要書類をコピーするという、違法なことをしているのにエンターテイメントとしては、成功してほっとするシーンは、良く出来ている。

しかし全体に画面が暗かった。日本の、この国の行く末が不安だからか、出だしのカメラの定まらぬ様子も敢えての撮影だとしたら、秀逸であるとばっかり言っていられないのではないだろうか。技術的なところは、藤井道人監督に聞いてみたいところである。

映画は良く見ると、二人の女性の生き方も示している。専業主婦と、働く女性の姿である。専業主婦は、夫の運命と共同で、明日は判らないという危うさを持っているとも言える。働く女性は、昔の表現でいえば、男性と同様に「家を出れば、七人の敵と戦わねばならない」どちらが良いとは言えないが、これからの女性は、自分の生き方は自分で切り開く勇気と知性が必要だと思う。

大衆的説得性が欠如

吉村英夫　映画評論家

よくぞこれだけ現実の政治腐敗を暴いたものを作ってくれた。マスコミが報じた欺瞞にみちた大学新設の問題よりも、本当はもっと黒い本質が隠されているかもしれないと示唆しているのも作り手の勝利であろう。山本薩夫以来なかった、

プロパガンダを超えたポリティカル・サスペンスになりえていると評価したい。後半の劇的高揚への運びもなかなかのもの。だが映画は娯楽性が必須条件と考える私にはいささか不満である。アラン・J・パクラという政治的な映画を生涯つくり続けたハリウッドの監督がいた。代表作はウォーターゲート事件を描いた『大統領の隠謀』（一九七六年）である。実に面白かった。アメリカのニクソンの汚いヤリ口が、異国の私が見ても実によくわかった。彼の遺作は『デビル』（一九九七年）で、これはアイルランド共和軍（ＩＲＡ）の武装闘争の傍流の話をアクション映画にした娯楽映画。私はドンパチ映画は得手ではないが、Ｈ・フォードとＢ・ピットの対決には手に汗を握った。そのパクラにも『ペリカン文書』（一九九三年）のような失敗作がある。鳥のペリカン保護問題から起こるエリート裁判官殺人事件を題材にしていたが、面白くない。こんがらがってストーリーをうまくつなぎ合わせることができていない。

『新聞記者』にも、映画を楽しみたいという観客をはじいてしまうところがある。『ペリカン文書』的なのだ。権力の傲慢を暴き出し、反民主主義を糾弾するのを楽しんでもらうという点で不十分なのである。

「中日新聞」のコラム「大波小波」が、映画館は大入りで、映画が終わったとき拍手が起こったと誉めていた。だが拍手があったことは、観客が、現実に進行している日本の権力の腐敗堕落を糾弾することをはじめから「是」とする「確信犯」ばかりだったように推測させる。これでは「ウチワ」の映画になってしまう。ポリティカルなもので楽しむ映画であるよりも、現実政治の腐敗を憤る人たちに用意された内輪の「団結がんばろう」映画のように思える。私は決起集会用映画も評価するが、この映画をみて、政権政党に一票を入れようと思っていたが、野党に鞍替えしよう、と考えた人がいるだろうか。内輪でもりあがっているだけでは、傲慢な政権を倒す新しい力を拡大することはできない。政権はダンマリを決め込むことで逃げてしまう。

政治を真正面から取り上げた作り手たちへの拍手を惜しまないが、この映画は、『大統領の隠謀』や近年の『スポットライト　世紀のスクープ』（二〇一五年）のような誰をも説得する力をもった社会派映画に及ばない。否定派ではないが、いわば「無党派層」と言われる人達を奮起させるところにまでは至っていない。手に汗握る大衆的説得性がほしいのである。

汚い手段を使う政権への怒り

村上　暁　スタッフ

とても骨のある、重厚な映画だった。このような作品を作ることができたということに、日本の映画界は誇りを持っていいと思う。

重い、そして暗い。鮮やかな幕切れだが、カタルシスは感じられない。これも、現在の日本という国の情勢を踏まえての監督の演出だろう。正しい選択だと思う。

この映画は、東京新聞記者望月衣塑子氏の「新聞記者」という自伝を原案としている。著作の方では、中盤で森友学園について扱っており、それ以降が映画の世界とリンクしてくる。映画のストーリーはフィクションだが、シム・ウンギョン演じる東都新聞の吉岡記者は、まさに作者である望月記者を体現していると感じた。

著作の中から伝わってくるのは強い怒り。勇気を出して、実名でレイプ被害を訴え出た女性に対する誹謗中傷。政府の不都合な真実を告発した官僚の信用を貶めるために、政府に利用される新聞社。政府にとって都合の悪い記事を書かせないために、会社上層部を通じての脅迫。安定した政権を守るという名目のもと、汚い手段を使う内閣、利用されるマスコミ、だまされる国民。

シム・ウンギョンは、静かながらもあふれ出る怒りを体現していた。レイプ事件はハニートラップだと疑う男性記者や、自殺した官僚の家族に対して心ない取材をする記者など、同業者であるマスコミへ向けられていた怒り。父の死をも利用して口止めしようとしてくる官邸への怒り。怒りを原動力に、会見場の常識を打ち破ってまで菅官房長官に質問をぶつける望月記者を思わせる。

劇中、望月記者、元文科省事務次官の前川喜平氏らが、メディアについて座談会をしているシーンがある。映画の内容が決して誇張ではなく、現在の日本の政治、行政をそのまま映し出していることを思わせ戦慄する。座談会の内容は、望月氏、前川氏、マーティン・ファクラー氏共著の「同調圧力」で読むことができる。

偶然にも、映画公開前の6月初旬に前川氏、下旬に望月氏の講演を聞くことができた。前川氏の講演は、「全体の奉仕者と憲法　誰のために仕事をするのか」というタイトル。まさに劇中のエリート官僚杉原へ向けたメッセージ。公務員の仕事のあり方について、自身の教育行政の経験談を交えて、非常に興味深い話を聞けた。望月氏は、「民主主義とは何か

安倍政権とメディア」と題した講演。国民の疑問にきちんと答えようとしない官邸と、それを許しているマスコミの在り方について、危機感を感じさせる内容だった。事前にお二人の講演を聞いていたことで、より映画の内容についても深みを感じることができた。

この映画は、フィクションとして楽しむだけでは不十分だ。地位を失う危険を冒してまで、政府にとって不都合な真実を告発する人々の声は、信用に値する。著作、講演等を通し、映画の中で語られていること、語り尽くされなかったことを知りたい。そして国民として大いに怒りを募らせて、汚い手段を使う政権に対しノーを突き付けていきたい。